

仙林寺だより

NO. 57
編集・発行
松田正貴

行事報告

如意輪観音春期祭礼

観音様は正式には観世音菩薩と言いまして世の中の音を観じて救いの手を差し延べる菩薩様、私たちの苦しみ悲しみをすべてお聞きくださり、一人ももたらさずお救い下さる御仏様でございます。ところで、永平寺の寂光苑には、一葉観音様というあまり聞きなれない菩薩様がお祀りされております。道元禅師様が中国でのご修行を勤められ、帰りの船がしけにあつた時にお出ましになられ、嵐を鎮められたとの謂れがあることから、海や船に關わる皆様の信仰をあつめてお名前ですが、また、この一葉観音というお名前ですが、大きな一枚の葉を船に見立て、その上に立てひざでお坐りになつてお姿からその名が付いたようでございます。では、この葉っぱは何の葉かと申しますと、仏教には縁の深い美しい蓮の一弁と申すこととす。この蓮を使った言葉に一蓮托生があります。元々仏教用語で、生前のご信仰があれば、あちらの世では誰もが釈迦様の蓮の台にお救い下さいます。という仏教を志す者の安心のお言葉でございます。どなたの詩だったか思い出せませんが、次のような歌があります。

坂三里 辛さが楽し 里がえり
若葉のみなた 桃の咲く家

何の理由も無く三里の坂を越えろと言われれば、ただ辛いだけ しかしその若葉香る向うには、桃の花が美しく咲く生まれ育つた家があり、今日はじめて里がえりする私を今か今かと待って下さる母の元に帰ると思えば、と言ふような意味かと思ひます。観音様を信仰すると言ふ事は、やがてお帰りの命のふるさと安心してお任せできる心の拠り所が出来ると言ふことです。観音様は、遊化して救

うと言ひます。遊び教化する。遊びながら教え導くと言ひます。歌い、踊りながら教えを頂く、大いに楽しんでお帰り頂ければ観音様もお喜びになると言ひます。

第二回ぼばら桃の里花まつり



二十九日みどりの日、第二回花まつりが開催されました。稚児行列は順路こそ変更になりましたが、御詠歌講や地域名士の

方々、町内若手の有志等々総勢二百五十名の大行列です。当初心配されたお天気も法力の賜物か？雲一つない好天に恵まれました。当日はゴールデンウイーク初日の祝日で、ボランティアの人員確保に四苦八苦しりましたが、蓋を開けてみればなんと六十人を越えるスタツフにお手伝い頂きました。これもお釈迦様パワーの成せる業でしょう。行列折り返し地点は、薬師堂、山門の前でお釈迦様に甘茶をかけます。脇を固める仁王様も今日ばかりはお役御免、可愛いお稚児さんの様子に睨みも小休止のようです。御詠歌講のお出迎えを受けて参道を進めば本堂前では、仏の智慧を授かる加持を頂きます。そのお隣では護摩焚きの行が新たに登場、願い事を書いた木札が焚きあげられます。子供達が健やかに育つよう願う心は万国共通、智慧の心を授かつたお稚児さん達、きつと立派な大人になつてくれるでしょう。今回もまたボランティアの皆様には多大なご協力を頂きました。お礼に差し上げるものがあるとすれば、これからの社会を担う子供達の健全な心作りへの付託を担って頂いた善業の種というところでしょうか。大法螺会一同、心より感謝致しております。けつしてホラではありません。

ひつじ「お釈迦になる」

「おしゃや力になる」物を作り損ねたり、壊れて使ひ物にならなくなつた時に用いる表現かと思ひますが、釈尊「涅槃で元へ帰すからにしか考えが及ばず、実は恥ずかしなうらや四月八日の読売新聞編集手帳にこの様にあ

ります。細工職人が火を強くしすぎて溶接に失敗し、発した言葉に由来するらしい。「火が強かつた」。下町では「ヒ」を「シ」と発音したので「シガツヨカタ」、4月8日、嘘の様な本當の話、まことしやかな作り話か。さて、四月八日は花まつり、お釈迦様の誕生日をお祝い致します。存命ならば御年二千六百三十歳、三十五歳でお悟りを開かれたことから考えますと、その教えも実に二千五百九十五年変わらぬに伝わつた大伽藍尊者をまじめとするお弟子様達の微妙な火加減に間違ひはなかつたようです。ところが、世に仏教団を標榜する宗教団体はその数二百とも三百とも、まさに玉石混交、質の良い玉は、火入れすることで宝石として価値が上がる事もあるようですが、ご都合主義の火加減で溶解を試みた石はやはり路傍の石か、マグマの如くに熱した危険な石で、大やけどを負わせるに似非(エセ)宗教があつたことも忘れずにはいきませぬ。ここで、いわゆる宗派や宗祖を批判し、すべて自分たちのみが見受けられぬを批判し、すべて自分たちのみが見受けられぬを甚だしくは、を信じるものだけ救われる。甚だしくは、を信じるものだけ救われる。考へるとは全く相容れない考へ、慈悲の考へを越え、慈悲とは、およそ浅はかな人間の考へです。自分たの心に、おのれのみを施すも、の認識しておきます。決して特定の者を想定したのではなく、漏らす事無く普く施すところ、仏教的寛容さがあるものと存じます。と、としても、何時の日か接着部分に無理が生じ、遂には剥離してしまう結果は火を見るより明らか。お釈迦さまのお誕生の折、天から甘露の雨が降り注いだと言ひますが、雨は私たちが降らせたい象徴が、雨は降り注いでいる。私たちが降らせたい象徴が、雨は降り注いでいる。塩梅(あんばい)を知ると、雨は降り注いでいる。